

平成24年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

| | | | | |
|---|----|----|--|--|
| 区分 | 指導 | 題名 | 平成24年岩手県産大豆の生育経過の概要と特徴・特に夏季高温干ばつの影響の解析 | |
| [要約] 平成24年産大豆は、県中南部では7月から9月にかけての記録的な高温および8月から9月中旬にかけての少雨により稔実莢数および百粒重が低下した。県全体の収量は121kg/10aと平年並となったが、1等比率は11.7%と平年を大きく下回った。 | | | | |
| キーワード | 大豆 | 作柄 | 高温干ばつ | ○技術部 作物研究室 県北農業研究所 作物研究室 環境部 病理昆虫研究室 |

1 背景とねらい

県内における大豆の生育・作柄等に関する調査・情報を取りまとめ、その概要や特徴を整理し、今後の技術対応の資とするため取りまとめる。

2 成果の内容

(1) 生育経過

- ア 県中南部では、播種後、6月の低温および日照不足が影響したため、初期生育が確保されず、主茎長および主茎節数が平年を下回り、栄養生長が十分ではなかった。開花期は平年より2日遅くなった(表1)。開花期以降、高温・干ばつが顕著となり、9月の月平均気温は観測史上最高を記録した(表2)。これらが影響し、登熟および成熟が急激に進んだことから成熟期は平年より7日程度早まった(表1)。
- イ 県北部でも開花期が3日遅くなったが、登熟期間中に適度な降水があったことから、成熟期は平年より5日遅くなった(表1)。

(2) 収量及び収量構成要素

- ア 県中南部では、開花期以降、8月の高温少雨により結莢数が低下し、稔実莢数が平年を下回った。8月から9月中旬にかけての高温・少雨により、子実肥大が緩慢となり、その後の高温も影響して登熟および成熟が急激に進んだ結果、子実重が低下し、百粒重も平年を下回った(表1)。また、登熟期の高温により裂皮粒が増加し、急激に登熟が進んだ影響でしわ粒が増大した(表3)。
- イ 県北部では、登熟期間中の高温および適度な降雨の影響により生育が促進され、収量は平年をやや上回った。(表1)。
- ウ 県全体の収量は121kg/10a(平年117kg/10a)と平年並となったが、1等比率は、県中南部における外観品質の低下が影響し、11.7%(平年36.9%)と平年を大きく下回った。

(3) 夏季高温干ばつ対策

- ア 各地域の播種適期内で晩播とすることにより、登熟期の高温を回避することができ、収量の低下およびしわ粒の発生を軽減することができる。
- イ 干ばつ時の畦間灌水により収量の減少を軽減することができ、しわ粒の発生も抑制できる。

3 成果活用上の留意事項

全县での活用を対象としているが、気象および生育経過等は北上・軽米の調査結果を基にしている。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等

県下全域の大豆技術指導者、関係機関

(2) 期待する活用効果

現地指導における資料作成の資として活用

5 当該事項に係る試験研究課題

(890) 畑作物の生育相及び気象反応の解明 [H14~H24、県単研究]

6 研究担当者

伊藤信二、中西商量、小綿寿志

7 参考資料・文献

- (1) 麦類・大豆作況試験報告、病虫害防除実績検討会資料、農作物統計他
- (2) 平井儀彦ら(2011) 開花期の追肥と登熟期の環境条件が異なる形状のダイズ裂皮粒発生におよぼす影響。日作紀 80, 183-189.

8 試験成績の概要（具体的なデータ）

平成24年産 大豆生育経過概要図

